

変わらぬ希望を分かちあいたい

「心ある人々の真心を集めて力とし、最後まで踏みとどまって事実を見つめ、変わらぬ希望を分かち合いたいと考えている。先は長い。
良いクリスマスと新年をお迎えください。」

——中村 哲 (ペシャワール会報74号、2002年より)

誰も行かないから私たちが行きます

——アフガン東部地震への支援活動

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長 村上 優まさる

PMS職員たちの心意気

二〇二五年八月三十一日午後11時47分(現地時間)、ナンガラハル州とクナール州でマグニチュード6の地震が起き、二三〇〇名以上の方が亡くなるという大惨事が生じました。被害の出た地域はPMS作業地と重なり、第十次訪問でジャララバードに滞在していた日本人チームも現地スタッフも地震を体験しましたが怪我もなく、無事でした。

震災翌日にはPMS職員が用水路や取水堰げき、クナール河を視察し、大きな被害がないことを確認しました。その間に、震源地に近いダラエヌール診療所のある渓谷の上流域や、その隣の村々で甚大な被害が出ていることが判明、PMS職員たちが救助活動を行なっていたとの要望を日本の事務局に伝えてきました。私たちはすぐに賛同し、「ペシャワール会はアフガニスタンの人々と共に在る」というメッセージを送りました。

以後十月十四日までの期間、PMS職員によって、震災地域の調査、それに基づく緊急食糧支援、さらに、早い冬に見舞われる山岳高地の被災者へのテント配布などが行なわれました。総額七〇万ドルの支援金は千二百家族(一万二千人)への食糧や三千百張のテントなど、調査に基づいて公平に分配できました。二〇〇一年九月のアメリカによる空爆時や、二〇二二年の干ばつによる飢餓に対して実施したナンガラハル州南部山岳地帯への食糧支援の経験が生かされたのです。

これもひとえに長年にわたるご支援のおかげと感謝しております。

混迷するアフガンの現状

ところが、その九月にインターネットが二回にわたって遮断されました。銀行や航空業務をはじめ生活への影響が大きかったためか、インターネット停止は数日で解除されましたが、影響はまだ残っています。



ヌールガルキャンプに避難している子どもたち (2025年9月13日)

加えて十月十日より、パキスタンからの空爆を機に一部の地域で戦闘が始まりました。幾度か停戦はしたものの非難の応酬が続き、国境の閉鎖は繰り返し返され、物資の輸出入が混乱しているのが現状です。このような状況下でもPMSによる通常の医療・農業・用水路事業は営々と継続しております。中村哲医師の活動時はもっと身近に戦争があり、治安も悪く、危機が常態化した中でマルワリード用水路工事であったことを思い出します。

この九月・十月は、中村医師が示した道を、PMSもペシャワール会を支援してく

ださる皆様も、共に歩んでいることを強く感じる日々でした。「誰も行かないから行く、誰もしないからする」とPMS職員が声を掛け合って山岳奥地の被災地に出向いていたと藤田PMS支援室長が報告してききました。また、多数の支援者の方からご寄付や励ましの声をいただきました。ありがとうございました。被災者支援の詳細は藤田室長とハフィズラー医師の報告に委ねます。

*

十二月四日は中村医師の六回目の命日です。この日を期して『中村哲対談集 人・水・命』を刊行いたしました。中村の活動に共感を寄せてくださった各界の識者の方々と対話は、今こそ耳を傾けるべき示唆に富む発言が飛び交っています。また、中村の思索の過程や興味深いエピソードも語られており、中村をより親しく知ることができる貴重な記録となっています。

対談者は、徳永進、井上ひさし、池澤夏樹、鶴見俊輔、養老孟司、原京、辰野勇、菅原文太、大澤真幸、半藤一利の各氏です。楽しくお読みいただける本ですので、どうぞご購入ください。